

『#罪名。一万年愛す』（吉田修一著）を読んでみた。著者は『最後の息子』で文学界新人賞を受賞し作家デビュー。『パークライフ』で芥川賞を受賞。『悪人』で毎日出版文化賞、大佛次郎賞、『横道世之介』で柴田錬三郎賞、『国宝』で芸術選奨文部科学大臣賞を受賞。

探偵Tのもとに、ある宝石(25カラット以上のルビーでその名が「一万年愛す」)を探して欲しいという依頼が舞い込む。Tは長崎の九十九島の一つの絶海の孤島で行われる、創業者Uの米寿の祝いに訪れることになった。U一族と探偵Tとある女性の失踪事件を扱った元刑事等が、豪邸で一夜を過ごすことになったが、その夜、Uは失踪してしまう……。

Uの過去が明らかになるにつれて「戦災孤児」の悲惨さが語られる。物語が進行する中で、3つの映画『砂の器』、『飢餓海峡』、『人間の証明』の場面が語られ、それが事件解決のヒントとなっている(三作品とも、感謝を伝えに来た人間を自分自身の地位と名誉を守るためにやむを得ず殺してしまう話である)。

Uは失踪した女性の事件に関わっているのか、それとも……。このミステリーを撫ぜ私は「家族」に分類したのか。Uのにとっての家族とは誰かを考えさせられるからである。

『砂の器』は、松本清張の推理小説。東京都内で起きた、ある殺人事件を発端に、刑事の捜査と犯罪者の動静を描く。ハンセン氏病を物語の背景とした。方言に基づく設定(東北訛り思われる「カメダ」という言葉が事件の手がかり)が重要な鍵となっている。1974年に映画化。

『飢餓海峡』は、水上勉の推理小説。実際に同じ日に起きた洞爺丸事故と積丹半島の岩内大火をヒントに、時代を敗戦直後に置き換えて着想された。戦後の貧困に喘ぐ時期を生きることになった多くの日本人の悲哀が、主たる登場人物に投影されている。1965年に映画化。

『人間の証明』は、森村誠一の推理小説。西條八十の詩「ぼくの帽子」の一節に着想を得て執筆を始めた。東京のエレベーター内で、胸部を刺されたまま乗り込んできた黒人青年Jが死亡した。刑事らは、Jを乗せたタクシー車中で彼が「ストウハ」という謎の言葉を発していたことを突き止める。さらに別のタクシーの

車内からは、Jが忘れたと思われる恐ろしく古びた『西條八十詩集』が発見された。背景には敗戦後を生きた日本女性の事情が絡んでいた。Jの存在が世間に知れ渡り、過去に黒人と関係を持っていた事実が露見することを恐れた女性が自分に会いに来日したJを殺害し、事情を知っている男性も殺していた。感謝の言葉を伝えようとして来日した息子を殺すことになってしまった女性に、刑事は人間としての心の在り方を問いかける。1977年映画化。